

## 4 令和4年度学校経営報告

### 【今年度の取組と自己評価、達成度、課題と対策】

校長 永森比人美

項目	目標	取組と自己評価	達成度	課題と対策
学習指導	<p>外部委託の生徒による授業評価を行い、評価データに基づいた研修会を開催し、評価項目「授業を受けて学力や自分の進歩を実感できる」の達成率を80%以上にする。</p>	<p>各教科で授業改善を進めたところ、評価項目「授業を受けて学力や自分の進歩を実感できる」の達成率は<b>82.1%</b>であった。</p>	A	<p>経年変化の分析を行い、評価結果を踏まえた授業改善を一層進める。</p>
	<p>探究学習の深化を図るべく専門家を招聘した校内授業研究やティームティーチングでの教員との連携を強化し、授業力の更なる向上を図る。</p>	<p>自校で開発した探究テキストを改訂し、質を高めた。有識者からの助言により、探究学習について更に深めた。卒業生がゼミ活動にも参加するなど連携を強化した。</p>	A	<p>大学や卒業生の連携を継続して、持続可能な体制を整える。またMIEのテキストの開発に向けて研究する。</p>
	<p>グローバル企業、国内外の大学及び研究機関との連携の下、フィールドワーク活動による探究活動及び論文作成を通して、理数に対する興味・関心を高めるとともに生徒の多面的・多角的思考力を養う。</p>	<p>高尾山ビジターセンター、檜原村フジの森の取組の他、トトロの森など様々な場所でワークショップを実施した。大学研究室との連携を図り、探究活動の充実を図った。各種コンテストにも多数参加した。科学の甲子園で4位入賞した。</p>	A	<p>生徒の視野を広げる活動と継続的な活動のバランスを意識しながら活動を整理する。また、全校体制での探究活動指導を推進し、指導力の底上げをする。</p>
	<p>大学、企業、各種研究機関との連携をさらに深め、文・理を越えた価値創造力を鍛える教育を推進する。</p>	<p>大学・研究機関と連携した模擬授業、<b>STEAM</b> 教育、各大学主催の高大連携事業に参加する機会を設け、多くの生徒が参加している。 八王子市と近隣校と連携して、探究の成果や政策提案を実施した。生徒の課題意識から小学校でのボランティア活動を実現した。大林組・オリンパス・日立システムズ・東京大学史料編纂所等と連携し、探究の視点を提供した。 筑波大学 <b>GFEST</b> (ジーフェスト) 都立大高校生探究ゼミ</p>	A	<p>企業との連携した課題解決型のプロジェクトを実施していく必要がある。 前期生の段階で、地域の課題意識を形成できる機会を設定する。</p>

<p>Global Education Network 20 として、4 技能（聞く、話す、読む、書く）のバランスのとれた英語教育を推進する。外部検定試験等のスコアを伸ばしたり、資格取得を促したりして、各自の英語運用能力を把握させ、向上させる。</p>	<p>4 技能の習得に向けて、オンライン英会話、GTEC 全員受検を、英語科と進路部が中心となって実施した。また共通テストのリスニング対策について研究を進めた。</p>	<p>A</p>	<p>「Global Education Network 20」の指定を受け、4 技能をバランスよく育成させるとともに、英語で発表する際の表現力の育成を図る。</p>
<p>東京都イングリッシュ・エンパワーメント・プログラムにより派遣される JET 2 名を放課後の Reading and Discussion 講座及び海外の学校との交流等に関わらせ、生徒の英語を通して様々なテーマに基づく議論ができる能力や他国の同世代の生徒との交流を通して異文化理解に係る能力等を育成する。</p>	<p>2 名の JET や外部指導員が中心となり放課後の Reading and Discussion 講座や Global Scholars を実施し、様々なテーマについて議論ができる能力の伸長を図るとともに他国の同世代の生徒との交流を通して異文化理解を深めた。</p>	<p>B</p>	<p>今後もスピーチコンテスト、検定試験、TGG のプログラム等も活用して実際に英語を使う機会を増やし実践的な英語力を身に付けていく。</p>
<p>生徒を海外交流校との取組（オンライン活用を含む）に参加させ、海外の生徒と共同研究させる等して、国際感覚を身に付けさせるとともに、多角的、多面的な視野を育む。</p>	<p>ベトナム CVA 高校、イタリア・デララッカ高校とのオンライン共同学習を行った。国際会議と同程度の効果を得たと考えられる。</p>	<p>B</p>	<p>参加する生徒を増やすこと。関わる教員体制を整えることが課題である。</p>
<p>あらゆる学習活動の機会において主権者教育に取り組み、平和で民主的な国家・社会の形成者として求められる力を培う。</p>	<p>3 年では「税の作文」4・5 年では「JICA 国際協力エッセイコンテスト」に応募するなど授業以外でも社会課題に関わる態度を養成している。</p>	<p>A</p>	<p>生徒の自主的な取り組みを促す工夫が必要である。</p>
<p>成人年齢の引き下げに伴い、生徒に社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力や社会の形成に主体的に参画するための資質・能力を身に付けさせる。</p>	<p>家庭科・公民科の授業で実施するとともに講演会を通して社会に主体的に参画する態度を養成している。</p>	<p>B</p>	<p>生徒の主体的な取り組みを促す工夫が必要である。</p>
<p>「道徳」の授業を通して、道徳的価値の自覚を深めさせ社会の様々な場面や状況に応じて適切に選択・行動する能力を育成する。また、人間関係の構築に必要なコミュニケーション能力を向上させるとともに、人間としての在り方生き方に関する自覚を深めさせ、道徳的実践力を育成する。道徳授業地区公開講座の保護者や地域の参加者数を増やし、授業改善に結び付ける。</p>	<p>【前期生】 道徳授業地区公開講座を実施した。生命尊重や規範意識など適時適切な主題を設定し道徳的価値の自覚を深めさせることができた。</p>	<p>B</p>	<p>教科「道徳」の充実に向けて、指導方法や評価方法などを更に検討して、よりよい授業を実践する。</p>

	<p>「人間と社会」の授業において、社会の現実に照らした体験活動や演習を通じて道徳性を養い判断基準を高めることで、より良い生き方を主体的に選択し、行動する力を育成する。</p>	<p><b>【後期生】</b> グループ活動、様々な有識者による講座を通して、社会の一員としての理解を深めることの意識を高めることができた。</p>	<p><b>B</b></p>	<p>自己実現に向けて自分と向き合うことで、より良い生き方を主体的に選択し、行動する力を身に付けさせる。</p>
	<p>GIGA スクール構想、CYOD 事業を通して個別最適な学びと協働的な学びを一体化させるとともに、情報科の授業の充実を図る。</p>	<p>対面での授業においてもタブレットを活用した。</p>	<p><b>B</b></p>	<p>今年度の課題を整理・共有し、自宅へ配信方法や内容について改善していく。</p>
	<p>国語科及び英語科でデジタル教科書を活用し、効用の検証を行う。</p>	<p>国語及び社会の授業において、デジタル教科書の活用について検討し、効果的な活用方法について研究した。</p>	<p><b>A</b></p>	<p>知識伝達型だけではなく活動型の授業を展開し、さらに生徒の自主的な取り組みを促す工夫が必要である。</p>
<p><b>生活指導</b></p>	<p>いじめ防止  <ul style="list-style-type: none"> <li>いじめのアンケートを活用し、生徒部及び各学年によるケーススタディを年3回以上の実施し、いじめの早期発見・早期解決に当たる。</li> <li>PTA 役員会や生徒会との連携によるいじめの防止策を強化する。</li> <li>生徒が作成したSNS東京ルール为学校版を基にして、SNS等への書き込みによるトラブルの防止や携帯電話等を適切に利用することができる資質・能力を養う。</li> </ul> </p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いじめ防止調査は6、11、2月に実施した。生徒部と学年が連携体制を強め、早期発見と情報共有および経過観察を丁寧に行った。保護者とも密に連絡を取り理解と協力を得ることができ、いじめに関する重大事故は未然に防止することができた。</li> <li>保護者対象に講演会を実施して、スマートフォンの使用方法等について共有した。</li> <li>“SNS利用について考える会”を11期生が12期生に引き継ぎ活動を継続した。本年度は11期生が主体となった。校内でSNSの利用マナー向上の契機となった。</li> </ul>	<p><b>A</b></p>	<p>SNSに関しては、生徒に考えさせる指導を継続しながら、保護者と協力して対応していく。外部講師を招いての講演会の開催、保護者アンケートや保護者対象講演会等を実施し、SNS利用の指導に関して家庭の課題と学校の課題を明確にし、学校と家庭の連携体制を構築する。</p>
	<p>学級活動、朝礼、学年集会等における講話を通して、社会人として必要である基本的な生活習慣（ルールやマナーを遵守する態度）を身に付けさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝の検温消毒の指導を活用して身だしなみ指導を継続的に行い、きちんとした着こなしを定着させることができた。また、本年度も3年生の後期課程の制服採寸を学校で行って着用基準を周知し、進級前から服装</li> </ul>	<p><b>B</b></p>	<p>登下校マナーアップについては、感染症対策実施中のため、校外の指導が十分にできなかったため、次年度は生活委員会生徒による呼びかけを再開する。4月は新入生</p>

		指導を行った。		の登下校マナー定着の取り組みに注力する。
	八王子警察署との連携の下、「命の講演会」や「犯罪被害者の講演会」を開催し、生徒に「命の大切さ」を深く考えさせる機会を与え、心の教育を推進する。	命の講演会は、講演者も含めた感染症防止を図りながら開催することができた。実際に被害に遭われた家族の方のお話は、心に響く内容で命の大切さを考える良いきっかけとなった。	<b>B</b>	次年度も命の講演会を開催する。全国作文コンクールにも継続して参加する。
	産婦人科医及び精神科医を活用して、性に関する教育やメンタル面での支援を行う。	大学病院の専門家によるストレス対処法に関する講演会を6月にオンラインで実施した。	<b>A</b>	心理士や専門医を活用して生徒の心のケアに努める。また講演会を開催し、更なる充実を図る。
	特別な支援の必要な生徒に対する適切な手立て（個別支援計画の活用や特別支援学校との連携）を通して対応する。	現行の個別支援計画の様式を都の様式に照らして見直し、本校の実態に合った様式に改訂した。保護者との連携強化や、進路指導の支援を加えた。	<b>A</b>	改訂した個別支援計画を活用して支援を必要とする生徒の指導に当たる。
進路指導	チューターを活用し、生徒の自主学習を教員と共にサポートする。	平日放課後、原則2名以上のチューターを配置して、自主学習支援を行った。後期生の受験相談および3年接続補習で積極的にチューターを活用した。	<b>B</b>	生徒の参加度を高める工夫が必要である。探究活動に関わる学習支援も有効に実施できるよう体制を整える。
	自習室を整備し、生徒同士の学び合いの機運を醸成する。	各HR教室、視聴覚室、未来門、廊下自習スペースを自習場所として活用し、生徒の利用度も高い。	<b>A</b>	視聴覚室は校内行事で使用できないことも多いので、専用のスペースが必要。未来門も利用希望人数に比し手狭である。
	外部機関を活用した進学指導コンサルティングを通して得たデータを基にして、生徒や保護者の進路面接や進路指導に生かす。	進路に関する情報を適宜、教職員、生徒に提供した。進路通信を年10回発行。進路ガイダンス・進路学年集会は学期に2回以上実施した。保護者会では年2回、進路部の報告をした。	<b>A</b>	今後のキャリア教育について、見直し・改善をする機会が必要である。
	大学入学共通テストや難関大学の問題分析、予備校研修の分析会等の参加を通して、教員の受験指導力を向上させる。	大学入学共通テスト問題分析集、難関大学入試問題分析集を作成発行した。予備校の研修会に主要教科の教員が参加した。	<b>A</b>	2025年度以降の大学入試に対応した各教科の指導体制を整備していくことが課題である。

	国内外の大学と連携し、大学教授と本校教員の連携を通し各教科の専門性を高める。	国公立大学による分野別大学模擬授業・STEAM 教育講座等により大学教育の内容を学ぶ機会を提供した。	A	大学の授業や研究会に参加する機会を確保していく。
	大学の教員と本校教員の懇談会を通して、高大接続の在り方を研究する。	東京都立大学の研究協議会に2回参加し、高大接続のあり方について研究した。理学部特別講座を開催していただいた。	A	継続的に情報交換する教員の範囲を拡大していく。
	企業との連携を図り研究所への訪問や企業研究者から生徒への課題の投げかけを通して、課題解決型の生徒の力を高める。	日本政策金融公庫の講演を実施し、生徒にビジネスと社会問題の解決についての視野を広げた。	A	ビジネスプランコンテスト等課題解決型の取り組みを強化していく
	同窓会あかね会の協力の下、卒業生の進路追跡調査方法を確立する。	1期生追跡調査を実施。1・2期生による南多摩ホームカミングディ講演会。1期生による職業講演会を実施した。	A	2期生以降の追跡調査を実施していく。
特別活動等	異年齢集団の交流を取り入れた行事（体育祭、合唱祭、文化祭）を通して、生徒の思いやりの心、人間関係調整力、克己心を培う。	南魂祭（体育祭、合唱祭、文化祭）を開催することができた。富士森競技場やJCOMホールの活用など安全に実施することができた。文化祭においては、生徒のみ参加での開催となったが、非常に満足していた。新入生歓迎会及び生徒総会においては、生徒会が中心となって、企画運営した。全体を通して、後期生が範を示し具体的な目標となって、前期生に刺激を与え成長を促した。	A	次年度は、感染対策とともに、準備段階から異年齢集団の活動を活発化、相互の心身の発達を促す指導を行う。
	オリンピック・パラリンピック・レガシー教育の一環として、ボランティアマインドの醸成、国際理解教育を推進する。	東京五輪音頭2020からは、8時間の指導案を組み体育の授業で指導している。学校代表の4名（4年生2名、5年生2名）が1月31日から2月4日までフランスパリで現地の高校生等と国際交流を行い、プレゼンテーション発表をした。またその成果を3月に校外外で発表した。	A	東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとして残る教育を継続する。
	指導体制の工夫改善及び各部活動で前期課程から後期課程への円滑な指導の接続を図り部活動を活性化し、生徒の体力や気力を向上させる。また、3年生の夏休み明けに実施する接続テストを用いて、生徒に高校生になる心構えをもたせる。	部長会を前期後期合同で行い、年間を通して交流を図った。後期への接続に関して3年の2学期に体験入部を行い、入部届を提出できるようにしている。また、3学期から後期課程の活動時間で活動できるようにし	B	コロナ対応や、学習との両立と傷害予防の観点から活動時間を調節しながら、後期への加入率を高める工夫改善を継続して実施する。

	て後期への円滑な接続を図った。		
<p>防災支援隊の活動の充実を図るため、「東京マイタイムライン」の活用や専門機関（工学院大学等）と連携した防災活動研究指定校としての研究を深める。</p>	<p>4年生の防災デーは、八王子消防署北野出張所の指導を受け、地域の町会も参加して自助、共助を考える有意義な1日となった。2名の生徒が防災士養成講座に参加し、防災士の資格を取得した。12月には、工学院大学と連携して「帰宅困難者のための一時滞在施設設営・運営訓練」を行った。事前準備の段階から研究室の教授、学生も参加し、訓練行い、教職員と防災支援隊生徒で問題点や危機意識を共有することができた。</p>	A	<p>次年度は、工学院大学と連携しての「帰宅困難者のための一時滞在施設設営・運営訓練」を継続し、より研究を深めて本校の災害に対する対応力を高めるとともに、防災マニュアルの改訂を行う。</p>
<p>朝読書の推進、図書館の効果的な活用及びビブリオバトルへの生徒の参加を通して、生徒の読書の量や質を向上させる。</p>	<p>前期生の朝読書、100冊プロジェクト、図書館司書の指導による前期生ビブリオバトルへの参加に加えて、各教科及び総合的な学習における図書館利用を進めた。</p>	B	<p>読書の推進に向けて図書館活用を一層進める。</p>
<p>年間保健指導計画に基づき、担任、養護教諭、栄養士、保護者と連携し食育を推進する。</p>	<p>年2回の給食運営委員会の実施、保護者対象給食試食会はコロナにより実施できなかったが、給食便りを活用して食育を推進した。年間通じて牛乳パックリサイクルを行った。</p>	B	<p>牛乳パックのリサイクル方法について学年と調整を図っていく。</p>
<p>保健便り、給食便りを発行し、保護者等と連携してアレルギー対応に十分注意を払い、生徒の健康づくりを進める。</p>	<p>保健便り、給食便りを定期的に発行し、家庭との連携、健康づくりを推進した。</p>	A	<p>アレルギー対応に十分注意をして、継続する。</p>
<p>オンラインを活用した海外交流を通して、言語、文化、歴史等の知識を広げるだけでなく、生徒に多様性や様々な価値観を尊重することの重要性を理解させる。</p>	<p>ベトナム（ハノイ）やイタリア（レニャーノ）の学校とオンラインで交流を図り、とても貴重な経験となった。今後は訪問しての交流も含め、継続することが望ましい。2年生はイランとスウェーデン大使館を訪問し、外国の文化や習慣等を学ぶ貴重な体験となった。</p>	A	<p>海外との交流方法について、オンライン交流をはじめ、在日の外国人との交流や留学生の受け入れなども検討する。</p>

組織体制	各分掌・学年の年間業務一覧を作成し、全教員が分掌や学年の壁を越えて業務内容等に関する情報を共有できるようにし、企画調整会議の質を向上させる。	分掌や学年ごとに担当業務の把握をしたが、他の分掌同士で情報を共有するまでには至らなかった。	C	分掌間で情報を共有して組織的な取組となるよう推進する。
	学校の目指す方向性、校務の進捗状況を職員室に掲示して、教職員が絶えず校務全般に対する状況を把握できる環境を整える。	企画調整会議や担当分掌・委員会において進捗状況を把握し、打合せや職員会議等を通じて状況の共有化を図った。	B	企画調整会議での内容を全教員が把握するように周知していく。
	校務内規等の整備を通して、全教員が同一の視点で生徒の教育に当たれるようにする。	校務内規について検討し、必要に応じて修正した。	B	今後も課題毎に検討・修正する。
	OJT 機能を活用して組織運営を行う。	若手とベテランが共に課題について協議することでOJTにつながっている。	B	OJTを更に推進する。
	校内の言語環境を整えるため、教職員が生徒の範となる言動を心がける。	打合せ、職員会議、企画調整会議、個別指導を通して、服務等他の範となるよう注意喚起を行った。	B	教員同士が日常の会話の中で、自浄作用を高められる組織作りに努める。
募集対策	塾訪問を通して広報活動を積極的に行う。	管理職を中心に、塾主催の説明会へ参加するとともに塾対象の学校説明会を開催した。また入学生の在籍していた小学校にパンフレットを送付した。	B	さらに近隣の市町村の小学校に広報活動を進める。
	対面とオンラインを組み合わせ授業公開、学校紹介、学校説明会等を実施し広報活動の充実を図る。また生徒にアピール動画を作成させる。	J:COM ホールにおいて学校説明会、校内における学校公開をツアー形式で実施した。オンデマンド形式による授業体験の実施をした。	A	年間を通じた広報計画を改良し、さらに組織的な取組としていく。
	ホームページに新規事項を適時・適切にアップする。	ホームページは適時・適切に更新した。新ホームページをリニューアルした。	A	新ホームページを適切に更新していく。
	様々な分野の大会やコンテストに生徒を積極的に出場させ、広報に生かす。	科学オリンピック（化学、生物、地学） Tokyo サイエンスフェア 東大・GSC プログラム 全国高校生フォーラム 都立大学 探究学習合同発表会 科学の甲子園「都4位」 中学生科学コンテスト 八王子市 高校生によるまちづくり提案発表会	B	様々な大会やコンテストへ計画的に参加していく。年度を跨いで活動を継続できるよう、見通しを持つ。生徒の関心に沿ったコンテストを提案できるように他校の取組みも参考にしながら、これまで参加していなかったコンテストへの参加を検討していく。

		戸山高校サイエンスシンポジウム 長崎東高等学校WWL探究発表会 SDGs アイデアコンテスト 観光甲子園 高文連全国大会 東京都高等学校理科研究発表会 全国ユース環境活動発表大会 東京理科大学坊ちゃん科学論文コンクール 「入賞」 旺文社 全国学芸サイエンスコンクール 「入選」		
経営企画室との連携	校長、副校長、室長の毎朝の打合せを通し、経営参画型の経営企画室の運営を行う。	毎日、学校運営についての情報共有を図り、学校運営に対する経営企画室の参画を推進した。	B	担当を含めた打合せを短時間で行うなど効果的に学校運営を進める。
	適正な自律経営予算の策定と執行に務め、学校全体のコスト意識を高める。	予算の課題を共有し、改善を図った。	B	自律経営予算の活用について共有化を図り、校内で対応する。
	施設・設備の活用状況や修繕箇所の把握を行う。	修繕箇所の把握し、修繕に勤めたが、予算上の課題があり修繕が進まない部分もあった。	B	継続的に増改修の要望を出していく。
働き方改革について	教職員は各自週2回の割合で、定時退勤日を設け、年度当初の自己申告書の自由記述欄に記載し、ライフ・ワークバランスの推進に努める。	勤務時間を超えて行う業務の他、自宅に持ち帰って業務を行うなどの課題がある。	B	引き続き、ライフ・ワーク・バランスの推進に努めていく。
	効率的な職務遂行を目指し、時差勤務を継続しフレックス勤務を想定した校務運営について研究を進める。	育児や介護による時差勤務を奨励し、教員のライフワークに応じた勤務形態を実践することができたが、結果的に一部他の教員に負担を強いている課題がある。	B	土曜勤務や、展開授業の多い先生の時間割の組み方について、研究を進めていく。

【備考】表中の「達成度」は以下の基準によるものとする。

- A 目標に対する取組が十分であった。      C 目標に対する取組が一部不十分であった。  
B 目標に対する取組がほぼ十分であった。      D 目標に対する取組が不十分であった。

【重点目標・目標数値】

		令和4年度目標数値	令和4年度結果	令和3年度結果	令和2年度結果	平成31年度結果	
学力向上	生徒による授業評価において、学習効果の項目「授業を受けて学力や自分の進歩を実感できる。」の到達率ー		80%以上	88.0%	82.1%	79.0%	79.0%
	前期課程：都調査、全国学力学習状況調査、学力推移調査結果で前年度を上回る。		1ポイント	1年：+1.2 2年：+2.0 3年：+1.6	1年：-1.6 2年：-0.6 3年：-3.8	1年：+2.7 2年：-5.4 3年：+4.8	1年：+3.3 2年：+3.6 3年：-7.6
	後期課程：同一学年の外部模擬試験結果で年度末のS段階・A段階の割合が前年度を上回る。		1ポイント	4年：-17.6 5年：19.5 6年：-6.9	4年：+13.9 5年：-17.2 6年：+14.3	4年：-11.6 5年：+0.3 6年：-1.7	4年：-0.2 5年：-5.7 6年：+4.0
	5年生	国数英の3教科で学習到達ゾーンA段階を超える生徒	70%以上	73.3%	58.2%	70.1%	75.2%
		C段階の生徒	ゼロ	1.3%	6.4%	2.7%	0.1%
	2年生：GTEC for Students Core	平均点	505点	533.6点	495.8点	487.8点	515.6点
		570点以上の受験者	20%以上	29.9%	20.0%	19.2%	23.7%
	3年生：GTEC for Students Basic	平均点	590点	596.0点	580.9点	598.9点	586.7点
		615点以上の受験者	20%以上	40.1%	38.5%	42.7%	38.2%
	4年生：GTEC for Students Advanced	平均点	830点	903.1点	911.2点	868.8点	903.8点
		920点以上の受験者	20%以上	43.3%	43.0%	28%	41.0%
	5年生：GTEC for Students Advanced	平均点	870点	977.4点	929.4点	963.6点	968.4点
1010点以上の受験者		20%以上	34.0%	21.3%	38%	27.5%	
留学に挑戦する生徒		年間1~2名	1名	1名	0名	2名	

進路指導

教員の進路分析会を実施する		年間 2 回以上	年 2 回	年 2 回	年 2 回	年 2 回
入試問題分析 集の作成	大学入学共通テスト問題分析集を 生徒配布	5 月に	5 月	5 月	5 月	5 月
	難関国公立大学入試分析集を生徒 に配布	7 月に	7 月	7 月	7 月	7 月
3 年生：研究開発型大学や研究室訪問を実施		1・2 学期に	2 学期	2 学期	2 学期	2 学期
4 年生：2 学期までに興味ある学問及び希望学部 の方向性を決定している生徒の割合		8 割以上	88%	100%	97.3	100%
5 年 生	9 月までに希望学部・学科を具体化してい る生徒の割合	9 割以上	93.4%	96.2	97.8%	97.9%
	受験体制に入る時期	10 月	10 月	10 月	10 月	10 月
	全ての生徒が希望大学を具体化させる時 期	3 学期	3 学期	3 学期	3 学期	3 学期
6 年 生	研究開発型大学への進学を目指す生徒の 割合	8 割以上	96%	96%	95.9%	94.2%
	大学入学共通テスト 5 教科 7 科目を受 験する生徒の割合	6 割以上	60%	63.3%	51.1%	61.0%
	大学入学共通テスト・難関国公立大学合 格可能点数（8 割）水準以上の生徒の割 合	2 割以上	16.6%	11.3%	15.1%	18.4%
	難関国公立大学合格者数	13 名以上	現役 13 名	現役 16 名	現役 6 名	現役 13 名

生徒の心のケア	S C連絡会の開催	前期課程	週 1 回開催	週 1 回開催	週 1 回開催	週 1 回開催	週 1 回開催
		後期課程	月 1 回開催	月 1 回開催	月 1 回開催	月 1 回開催	月 2 回開催
	いじめのアンケートの実施		年間 3 回以上	3 回実施	3 回実施	3 回実施	3 回実施
	学校医等と連携した講演会を実施（産婦人科医及び精神科医等と連携した講演会）		それぞれ年間 2 回程度	コロナにより 0 回	コロナにより 0 回	コロナにより 0 回	それぞれ年間 2 回
	特別な支援の必要な生徒の個別指導に資する研修会を実施		年間 3 回以上	3 回実施	3 回実施	3 回実施	3 回実施
募集対策	適性検査の出願倍率		5 倍以上	4.14 倍	4.24 倍	5.06 倍	5.39 倍
	ホームページの更新回数		300 回以上	522 回		558 回	550 回
	授業公開、学校紹介・学校説明会等	実施回数	30 回	20 回	オンラインを含む実施のため不集計	オンラインで実施	30 回
		参加者数	3500 名以上	3800 人			4865 人
その他	サービス事故等重大事故		ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ